

「和平」の実態



http://news.bbc.co.uk/1/hi/world/middle_east/7114396.stm



http://www.abc.net.au/reslib/200702/r127386_416932.jpg

(写真) 左：アナポリス中東和平国際会議において（2007年11月、米国メリーランド州アナポリスにて米国の仲介によって開催）右：ライス米国務長官エジプト訪問時（2007年2月）

2007年11月、アナポリス中東和平国際会議が米国の仲介によって開催され、7年ぶりとなる中東和平交渉の再開が合意された。しかし肝心の「和平」へ向けた取り組み、すなわち国境線、ユダヤ人入植地、エルサレムの帰属、難民の帰還など「最終的地位問題」についての話し合いはなく、以後も交渉を重ねてはいるものの事態の進展が望めるような状態には未だ至っていない。むしろ、アナポリス会議で和平交渉の土台とすることが合意された2003年のロードマップでは新たな入植地の建設を凍結することが定められているにもかかわらず、会議直後にイスラエルが入植地の拡大を発表したり、ガザ地区を完全封鎖したりするなど、「和平」とはま逆のことが行われている。そもそもイスラエル・パレスチナそれぞれを代表するオルメルト首相、アッパース大統領ともに国内の支持基盤が弱く、首脳レベルの交渉にどれだけ実効性があるのか疑問である。また、住民の置かれている状況には会議の前後で大きな変化はなく、むしろ多くの地域ではより厳しい占領政策がとられ、生活が困難になっている。アラブ人地区のインフラ整備が進まない一方で、分離壁、入植地の建設は今も続いている。デモでは子供や無抵抗の人々がイスラエル兵に撃たれている。世界はこのような実態に目を向けることなく、「和平」交渉の再開を歓迎していてよいのだろうか。無数に分断され、飛び地の集合体となってしまったパレスチナの現状を知った時、「二国共存」というのが机上の空論に思えて仕方がなかった。



写真(左から) 1)パレスチナ自治区ラマラーへの入り口にあるカランディアチェックポイントにて車を降りてイスラエル兵によるチェックを受けるパレスチナ人と車両、そのためチェックポイントでは常に渋滞 2)自治区ヘブロン of イブラヒムモスク手前のチェックポイント 3)ヘブロン of マーケットにて、二階に移り住んできたユダヤ人が1階のアラブ人に向かってゴミを投げるため、金網が張られている 4)西岸内のピリーン村にて、分離壁撤去を求めるデモが毎週金曜日に行われている、時にはピリーン村の住人とイスラエル兵の衝突も

